

第1章 『大森貝塚』に至る経過

1.1 モースの計画

数多い日本の遺跡の中でも大森貝塚は、教科書にも掲載されて誰もが一度はその名を耳にしたことのある、いわば国民的な遺跡である。

長く鎖国政策を続けてきた極東の島国に、腕足類という珍しい海洋生物が豊富だと聞いて1877(明治10)年6月、自費で来日したアメリカ人動物学者がE.S. モースである。横浜から新橋に向かう客車のたまたま陸側に席を占めていたモースが、流れていく光景から「貝塚」の存在を認識し、さらに待ち構えたように創設成る東京大学の教授に迎えられ、その後ろ盾を得て類い稀な行動力で貝塚の発掘調査を成し遂げた。これだけでも驚嘆すべき事実の連続だが、同時にモースは出土遺物についての詳細な研究報告書を刊行しようとする。そのために必要なのは単なる絵図ではなく、事物の情報を正確に伝え得る「実測図」でなければならないと考えたのである。

「科学的性格のもの」機械製図の思想に根ざした正確な投影や縮尺の統一など、大森貝塚の実測図は考古遺物の記録として先進的であり、逆に同時代からすれば極めて特異である。なぜモースはそうした作図法を採ったのか。

モースがアメリカで貝類の図を描くことで生計を立てていたことはよく知られている(ウェイマン1976:p.231)。しかしそんなモースも『日本その日その日』(モース1970)の1877(明治10)年9月22日の項に(以下『その日』と略し、1～3までの巻号を示す)、「今日と昨日は、大森の貝塚のことを書き、そこで発見した陶器の絵を書くのに大勉強をした」と吐露している(『その日2』:p.21)。貝や腕足類を日常的に描いてきたモース自身にとっても、個体差があり遺存率も異なる太古の人為物をどう記載するかは最大の問題だったろう。そしてモースが行き着いた結論は、原文で“a scientific character”とある(Morse 1917: Vol. 1, p. 301)、それが「科学的性格のもの」であるという一点である(『その日2』:p.21)。

大森貝塚の遺物図はまさに、「科学的性格」であらねばならぬという原則で貫かれている。このことによって単なる挿絵ではない「実測図」として、考古学史上のみならず広く科学史の上からも注目されるべき成果となった。

一般に大森貝塚の発掘報告書と呼ばれている1879(明治12)年刊行の英文報告書“*Shell Mounds of Omori*”は、“Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan”(以下『大森貝塚』“Omori”と略)、つまり我が国初の大学紀要である『東京大学理学部紀要』の第1巻第1部であり(Morse 1879b)、作図はこのためになされた。規格は当時四六倍判といわれた(松村1926)、28.6×19.5cmの大きさである。本文は英文活版印刷で巻頭に発掘風景の石版画、中に28.6×36.8cmの出土遺物実測図の石版画17枚と銅版画1枚の計18枚の折込図版が入る。『大森貝塚』に5か月遅れて矢田部良吉が訳した邦文版も同じ折込図版を使って、『理科会粹』第一帙上冊『大森介墟古物編』(以下『介墟編』と略)として刊行された。しかし本文は『大森貝塚』の英文を訳したのではなく、あわたたしく加除筆したモースの原稿を基にしたため両者の記述には不一致がある(佐原1977: pp.34～35)。

『大森貝塚』序文末尾には、出版までの作業にあたった日本側関係者の名が列記されている。これを『介墟編』に従うと、「画工木村氏 石版工松田氏 印刷師日就社」となり、「心ヲ盡シテ其工ヲ精巧ニセル」と続く(モールス1879)。また、「製図(図版18を除く)と石版刷りとが、日本人の職人だけで行われたことを考えると、外国様式の製図の技法も石版刷りの技法も、彼らには、まだなじみのうすいものなのだから、技術が完全ではないことも少しはゆるされると思う。

いっぽう、図そのものについては、輪郭はすべて正しく、じゅうぶんに信頼できる。植字と印刷にかんしても同様に一言しておきたい。その作業は英語を一語も話すことができない植字工の手によって、日本の会社でおこなわれた。この本の印刷に使った紙もまた日本製である。したがって植字から製本にいたるまで、本造りの技術面は完全に日本人の手でおこなわれたことになるのであって、私は、いささかの誇りをもってこの点を表明しておきたい」と、最大限の賛辞をおくっている（モース 1983：pp.12～13）。

すべて日本人の手によったという作業の中で原図を描いた「画工木村」とは大学ではなく、当時新設なった教育博物館に勤務していた画家の「木村静山」である。静山は号であろうが、本名はわからない。静山はモース自身が描いた『大森貝塚』第18版の軟体動物を除いて、すべての大森貝塚出土遺物の実測図を描いた。モースの目指した「科学的性格」は、日本人画家木村静山の手を借りて具体化していった。

木村静山と伊藤圭介 木村静山とはどういう人物なのか、なぜ大森貝塚の遺物実測をすることになったのか。作図の具体的過程を知るにはモースから直接指示を受けた静山の言動を探ることが最良である。しかしモースとその周囲に集った明治を代表する学者や官吏については折々に光が当てられ業績が伝えられているが、モース指示の下、短期間で困難な実務を担った木村静山という一画工についてはいくつかの図譜は残っているものの、残念ながらその動静がよくわからない。画家でありながらその風貌を伝える肖像も、一葉の写真も得られなかった。『その日』にも静山についての記載はなく、当のモースにとっても画工とはそういう存在だったのである。

他に手がかりはないか諸所の文献をあたるうちに、静山が博物館に職を得るには仲介者がいたことがわかった。それが尾張の町医でフィリップ・フォン・シーボルト Philipp Franz Balthasar von Siebold に師事し、日本近代植物学の祖といわれた伊藤圭介（号錦窠）である（Fig. 1）。

伊藤は1803（享和3）年に名古屋呉服町で生まれ、1901（明治34）年に99歳の長命で東京にて没した。伊藤の編んだ木類の資料集『錦窠植物図説』第139冊に、「オイマツノ図ハ木村静山氏ノ筆也 静山ハモト長崎ノ産ニシテ、多年横須賀ニ在テサバチェ氏ノ為メ写生ヲナセシガ、沙氏去テ後錦周旋シ来テ東京ニ在テ後多年ナラズ終ニ没ス」という添え書きのもと（土井2003・名古屋大学附属図書館他2003）、その図が示されている（Fig. 2）。ここに静山の動静の一端が知れる。さらに240冊にも及ぶ伊藤の膨大な日記があることもわかった。



Fig. 1 Portrait of Keisuke Ito (Nagoya University Library, 2001)



Fig. 2 “Kinka Syokubutuzusetu” (National Diet Library website)

毛筆で書き連ねた個人の筆跡をひとつひとつ紐解くという労多い作業は、名古屋市東山植物園圭介文書研究会によって手がけられ、『伊藤圭介日記』として逐次刊行されている（圭介文書研究会編 2005～2009・2014・2015）。伊藤は日常の出来事を簡潔に、しかも自らが送付した手紙の写しまで実に几帳面に書き残していた。幕末から明治に到る学界事情のみならず、当時の市民生活を知ることのできる点でも貴重な史料である。そしてその中に関係のあった木村静山についての記載も見出すことができた。ここから謎多い『大森貝塚』実測図と静山との関係をうかがうことができる。

発端は伊藤が同じ植物学者のフランス人医師サバチェ Paul Amédée Ludovic Savatier と交流を持っていたことに始まる。サバチェは 1865 年に来日した、いわゆる御雇い外国人である。植物にも造詣が深かったサバチェは横須賀造船所に勤務しながら、周囲の三浦半島や鎌倉で植物を採集していた。その標本を写生したのが静山である。しかしサバチェは 1876（明治 9）年 1 月に任期を終え離日する。同時に静山は生活の糧を失うことになったが、そこに同好の士であったサバチェを通じて静山を知る伊藤が東京に職を斡旋することになったようだ。

伊藤は 1861（文久元）年に幕府に招かれて尾張から江戸の蕃所調所に出仕し、明治に入ってから小石川植物園に関わった。そこで本郷真砂町に住まいし、1877（明治 10）年 4 月に東京大学が発足すると 71 歳で理学部員外教授となる。同時に同年 8 月に新設なった教育博物館へも月 3 回の出勤を命ぜられる。

静山の名が伊藤の日記に最初に現れるのは 1876（明治 9）年 2 月 1 日の項であるが、それはいきなり就職についての具体的なやり取りから始まる。「山科へ返書、（中略）将木村静山之義御尋御奮中之趣」とあり（圭介文書研究会編 2005：p.32）、以下伊藤は山科にたずねられた静山の経歴について当人の言をもとに綴っている。「山科」とは後に明治天皇の侍医となった「山科元行」のことで、「明治 8 年ごろ文部省博物館十等出仕・小石川植物園担当」（圭介文書研究会編 2005：p.76）であり、伊藤の近くにあつて採用の窓口役だったようだ。

伊藤は山科に、静山は長崎出身で絵を学び、兵庫に出て外国人の通訳のもとに身を寄せ、後に横須賀に行きサバチェの仕事をしていた。サバチェ帰国後はイギリス人についてそこで画の修練を積んでいたが、外国人よりも日本人との仕事を望んでいると伝えている（圭介文書研究会編 2005：pp.32～33）。翌 2 日「明朝画工へ之状相認メ山科へ可相廻事、再考此方より矢張直々状可出、ソノ趣山科へ可申置也」（圭介文書研究会編 2005：p.36）、さらに 3 日「横浜画工静山へ出状」（圭介文書研究会編 2005：p.37）と連日のやり取りの後に、晴れて 2 月 8 日には「静山事昨七日来訪、東京博物館へ御雇被命之旨風意聴」（圭介文書研究会編 2005：p.38）ということになった。就職先は伊藤の小石川植物園ではなく教育博物館である。明治 10 年前後に矢継ぎ早に官立の教育施設が整備される中で、その時点の必要度、緊急度に応じた結果であろう。

横浜に住んでいた静山はその後 4 月 6 日、「静山来、転宅之旨」（圭介文書研究会編 2005：p.80）となり、博物館への就職にあわせたのであろう転居している。静山はさらに伊藤から資金を借りて 1878（明治 11）年 6 月 8 日、「静山来、新宅江転居之沙汰」（圭介文書研究会編 2010：p.81）と新居を構えている。伊藤の記した住所録には静山の住まいが、「下谷南稲荷丁廿番地、廣徳寺より南へ出ル廣徳寺横丁、旧ノ阿州候隠宅跡」とある（圭介文書研究会編 2007：p.145）。台東区立中央図書館所蔵の明治 9 年版の地番図に、廣徳寺から現在の浅草通りをはさんで「南イナリ丁」とあり、「廿」の区画がある。現在の東上野 3 丁目 14 の一角にあたる。本郷真砂町の伊藤とは不忍池を挟んで東西に位置し、教育博物館も現在の東京藝術大学構内にあったから職住ともに行き来のしやすい位置にあった。ちなみに南にはモースの職場である東京大学法理文三学部の神田

一ツ橋校舎、官舎は本郷加賀屋敷五番館で、小石川植物園を入れてもおよそ一里四方の範囲に関係場所が集中している。

静山について伊藤の日記には、博物館への就職が決まる1876年（明治9）年がもっとも記載が多く、次いで翌1877年から78年にかけてもしばしば来訪が記されている（圭介文書研究会編2005・2006・2007）。静山は妻子を伴って来ることもあり、住宅資金貸借の件をみても公私共に伊藤家とは親密な関係にあったようだ。

静山の生年は不明だが、1885（明治18）

年5月16日に没したことが伊藤の日記にある（土井2003：p.81）。名古屋市東山植物園伊藤圭介記念室蒲原政幸氏の御教示によれば、そこには前記住所も記されており、結局終の棲家となった。しかし享年何歳であったのかは書かれていない。これからという年齢だったと思われるのは、1877（明治10）年12月29日の日記に静山に子供が生まれたという記載があること（圭介文書研究会編2008：p.153）、同じように画工として大学や博物館に勤務しながら画家としても名をなした、長原孝太郎や平木政次のような作品も伝えられていないからである。求めに応じ実物を正確に描くいわゆる「真写」を繰り返しながら、個性を出してはならず、しかし才能なくしては成り立たない作業の日々に、静山も画家としての大成を夢見ていたことだろう。

モース来日 1877（明治10）年4月12日東京大学創設、6月17日にはモースが横浜港に到着する。研究目的の自費旅行であったにもかかわらず、来日わずか1週間で当時日本の教育行政を統括していた文部学監のマレーや文学部教授の外山正一とも会い、教授就任は既定路線となっていた。6月24日午後、モースは建設中の博物館を訪問している（『その日1』：p.28）。

モースが東京大学教員として正式に採用となったのは1877（明治10）年7月16日であるが内定は7月12日である。後に一時帰国中の1878年2月8日に田中不二麿文部大輔より太政大臣に上申され、後にこの日にさかのぼって2年間教育博物館嘱託ともなった（椎名1988：p.86）。有為な人材と見れば人種や門閥にとらわれず、さらうように獲得し要職に就かせる。モースにしても当初から、大学と博物館とは一体のものという認識を持ったろう。

残念ながら伊藤の日記は、この6月から8月までの分が欠けている（圭介文書研究会編2008：p.1）。一方『その日』にはおそらくモースが教授就任の内定をもらった7月12日午後、「先日の午後伊藤氏という有名な老人がドクタア・マレーを訪問し、私も紹介されるの名誉を持った。（中略）数日後彼から日本の植物に関する全三巻の著書を送ってきた」（『その日1』：p.122）と、肖像画を伴って記されている。『教育博物館年報』には1877（明治10）年9月15日、「東京大学理学部教授米国人モースニ本務ノ余暇ヲ以テ時々来館シ列品ヲ調査スルコトヲ依頼ス又同学部員外教授伊藤圭介モ毎月兩三回来館シテ其調査ニ興ルノ命ヲ領ス」と、モースに続いて伊藤も博物館への関与を命ぜられている（文部省1877：p.457）。初代館長は貝塚調査にも同行した理学部教授の矢田部良吉であり、こうしてモースにとっては事実上大学と博物館の双方に自らの意向を反映し得る体制となった。

教育博物館は1877（明治10）年8月18日の土曜日に開館した（Fig. 3）。上野公園では21日から第1回内国勸業博覧会も開催されたから、周辺は大変な賑わいだったろう。モースは9月



Fig. 3 “Kyoiku Hakubutsu-kan An-nai”
(National Museum of Education 1881; National Diet Library website)

12日に再度教育博物館を訪れている（『その日2』：p.7）。活動を開始した博物館には画工として職務に励む静山の姿もあったろうし、モースもそれを目に留めたに違いない。そしてその直後に貝塚が調査される。

周到な計画 大森貝塚の位置については本家争いのような不毛な議論があるが、モースは貝塚が3か所あったことを記述しており（モース1983：pp.20～21）、今その位置を正確に特定することなどできない。逆に地番の特定できた現品川区側私有地の調査時には一時帰国しており、そこをモースが調査した大森貝塚とはいえない（田中2007：p.85）。モース自身が直接調査したのはあくまで線路際の鉄道省敷地内であり、それは計3回行われている。教育博物館の列品調査を依頼された翌日の1877（明治10）年9月16日に第1回目、18日かまたは19日に第2回目を行っている（磯野1987：p.116）。そして3週間の間を置いて特に第1回発掘“in the first excavations”と呼んだ、最も大掛かりな10月9日の3回目の調査となる（Morse 1879：p.3・『その日2』：p.69）。しかし1回目でたくさんの土器と土版等が得られており（『その日2』：p.10）、明らかにモースはその時点で貝塚の内容を把握していた。最初から、「私は一般的な記事を『月刊通俗科学雑誌』（“Popular Science Monthly”、以下『PSM』と略）へ書き、次にもっと注意深い報告書をつくり上げることしよう」（『その日2』：p.10）と、報告書刊行までの計画を表明している。第2回目にも完形土器や骨角器等を掘り出し、前記『その日』の9月22日にあるように概報の執筆と土器実測も開始している。完形土器は単なる散布地からは得られない。鉄道省敷地内がもともと、遺跡の中枢部にあたっていたのだろう。『大森貝塚』掲載遺物は帰国前にほぼ決定されたのである。

モースは『PSM』の前に、図を伴わない短報を“Nature”に寄せている。脱稿日は2回目調査後の9月21日で、22日の『その日』の記事はこのことを指していよう。“Nature”の中で、「莫大な量の土器、その装飾の多様性」と十分な成果を示しており、しかも「東京大学の総理・総理補、加藤（弘之）氏・浜尾（新）氏」から、「あらゆる便宜が私に与えられることになっている」と、その後の計画まで誇らしげに宣言している（モース1983：pp.127～130）。そして「ここ数日間、私は陶器の破片の絵をかいているが、装飾様式が種々雑多であることは著しい。襲及び破片は、特に記した物以外、全部実物の半分の大きさで描いてある。（中略）大学には石版用の石が数個あるから、私は発見したものは何によらず、これを描写しよう。大学は、この問題に関して私が書く紀要は何にもまれ出版し、そして外国の各協会に送ることを約束してくれた」（『その日2』：pp.28～29）と、きわめて具体的な方針のもと『大森貝塚』の出版とその後の情報発信にまで言及している。この記述を行った日付は明らかではないが、磯野直秀は2回目の調査以降で3回目の前となる21～24日の間と推定している（磯野1988b：p.471）。モースは「特に記したものの以外」と縮尺を分けていたことにも触れており、『大森貝塚』に向けた実作業を始めていたことをうかがわせる。精力的なモースの性格を思えば21日から日を置かずというところではないか。なにしろモースはこの期間に、大学に考古展示室すら設けているのである（『その日2』：p.29）。さらに一時帰国中には『東京大学法理文三学部第六年報』に13頁にわたって報告されている、大学のための驚くべき質量の交流事業も実施している（東京大学1878：pp.64～77）。この本気度をみれば、モースに心酔する日本人の多かったこともうなずける。

「静山トラレヌ様」細かい日付にこだわるのはモースは発掘調査に際し、最初から『大森貝塚』刊行の基本方針をもって臨んでおり、当然必要な作業も細部まで具体的に計画し、実行に移していたと推定されるからである。

『伊藤圭介日記』には伊藤がモースとともに文部省から博物館への出勤について通知を受けた

のは、『教育博物館年報』の9月15日ではなく20日となっている(圭介文書研究会編 2008 : p. 58)。私的な日記に作為があるとは思えないから、この齟齬には理由があると考えられる。15日は第1回調査の前日であり、20日なら第2回調査直後となる。どちらの日付でもモースと伊藤に対する博物館への発令が実質的に貝塚調査から発した可能性が高い。つまり第1回調査後、「もっと注意深い報告書」を作ろうとしていたモースはすでに静山を使って一部実測をさせていて、第1回調査前に遡って博物館への関与を公的に命じた形にしてつじつまを合わせたのではないか。貝塚は専門外の伊藤に対する発令がモースと同時にあったのも、静山との関係があったからと思われる。そこで関連する期間の日記とを照合すると興味深い記述に行き当たる。

伊藤の日記には第1回調査を行った9月16日の日曜日、留守中に「今朝留守ニ静山来ル」(圭介文書研究会編 2008 : p.52)とあり、さらに翌17日月曜日にも「静山来」と再訪を受けている。静山にとって緊急に伊藤と相談する事案が生じたようであるが、しかしその内容は記されていない。10月7日日曜日にも静山の来訪があり(圭介文書研究会編 2008 : p.70)、そして9日にモースが第3回目の調査を行って1週間あまり過ぎた18日、本来簡潔に人名や用務を記すこと多い伊藤の日記に奇妙な記述がみえる。

「静山トラレヌ様可注意申置 □□□(3文字欠) 同人へ加増之義可被
申達義申聞置 此方よりも可遣置候旨可申置旨 教育博物館ハ山
下ニテココニテ居候様子」

というもので (Fig. 4・圭介文書研究会編 2008 : p.78)、静山をめぐる争奪戦のような状況が生じたことを示している。「使うならその分給料を上げてやれ」とも訴えているようだ。前述したように日付からしてもこれはモースが10月9日の第3回目調査以前、つまり9月16日の最初の調査後から遺物実測に博物館所属の静山を関わらせており、さらに本格的に従事させようとしたことから生じたトラブルと推定される。この項目の前に矢田部良吉との件が綴られているから、伊藤が申し入れた相手は館長の矢田部かもしれない。だとすればさらに信憑性が増す。「あらゆる便宜が私に与えられることになっている」モースにとって、調査とその後の『大森貝塚』刊行が胸中があれば、画工静山の存在は自然に結びついていったはずである。博物館への辞令が15日となったのはその背景があったからであろう。

モースとともに博物館への関与を命じられた伊藤だが不思議なことに、現在公刊されている日記には一画家に過ぎない静山については頻繁に記されているのに、著名なモースに関する記述はない。専門が異なったからであろうか。しかし伊藤は自身が1876(明治9)年に著した『日本産物志前編—美濃部上—』に石鏃や磨製石斧を掲載しているから (Fig. 5)、考古遺物についても当然関心があったに違いない。さらにモースは1878(明治11)年12月3日に矢田部や松村壬三らとともに小石川植物園で発掘調査を行った。しかも初鹿野博之による Peabody Essex Museum のモース資料調査によって見出された出土土器の実測図は、明らかに静山によるものである(初鹿野 2017)。しかし調査当日の伊藤日記には全く触れられていない。自らが就職に尽力した静山に対するモースの介入を快く思っていなかったからではないか。

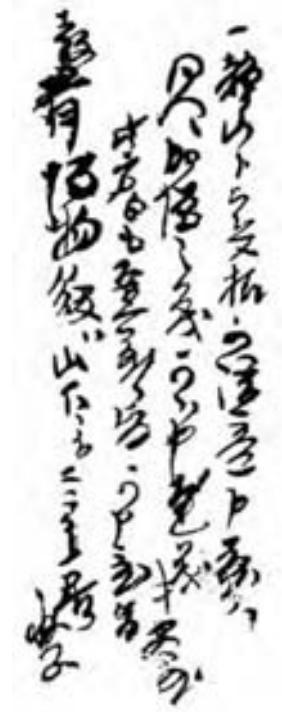


Fig. 4 The diary of Keisuke Ito
(Keisuke Document Study Group ed. 2008)

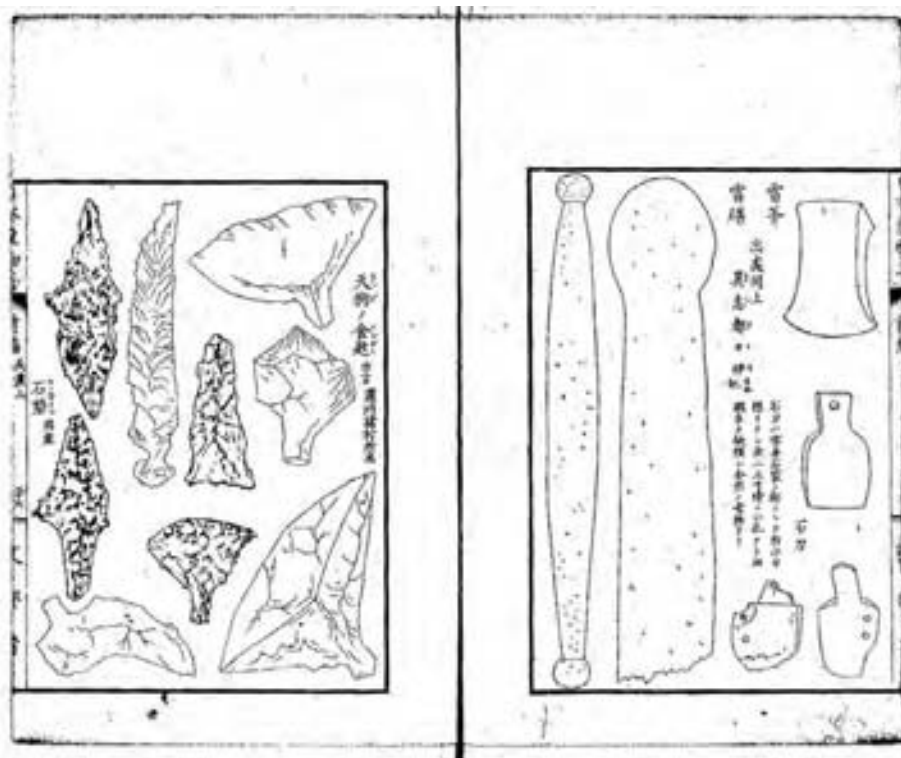


Fig. 5 “Nihon Sanbutsu-shi Zen-pen” (Ito 1876; National Diet Library website)

創設当時の教育博物館の職員構成は館長以下 19 人で、画工はただ一人である（文部省 1877：p.464）。同年の『東京大学法理文三学部第五年報』の大学の職員表には、「工作方」・「製作方」という名称は見えるが「画工」はない（東京大学 1877）。発足時で専門技術者がいなかったとしても、なぜモースは他機関の職員を使ってでも強引に押し進めようとしたのか。

静山はフランス人のサバチェやイギリス人とも仕事をしてきた。伊藤日記には横浜にいた静山が外国人向けの肖像画なども作成していたことが記されているから、多少は外国語も理解できたのかもしれない。技量に加えて経歴からも、モースが自らの意図をより伝えやすい人物だったということがある。しかしさらに切迫した事情は、つまりモースには時間がなかったのである。そもそもモースの任期はわずか 2 年、大学での本務を差し置いて貝塚報告に専従する余裕など最初からない。さらに来日前からの約束で大学との契約書にまで明記した、講演のため一時帰国する 11 月 1 日の期日が迫っていた。離日すれば 5 か月間は戻ってこれない。「出土した土器の様々な形態・装飾を余すところなく図示するのがよい」とした報告書で（モース 1983：p.11）、出発までの短い期間に最も肝心なしかも手間のかかる実測図に早くめどをつけておきたい、その一心だったろう。

全体の工程は後に Table 1 に一括したが、初来日時のモースの行動を一言でいえば、諸事立案することと実行することが同義であった点である。佐原真は「報告書図版の準備は早くとも 1878 年春以降」としている（佐原 1977：p.47）。モースが一時帰国を終え、日本に戻ってからということだ。ウェイマンも “done probably 1878-79 while in Tokyo” としている (02-01)。しかし私は前述のように準備どころか作業そのものがその程度の差はあれ、すでに第 1 回目の調査

を行った1877(明治10)年9月16日直後に始まっていたと考える。驚くべきことに当初から『大森貝塚』への実作業が行われていた、そう考えるさらなる理由は図そのものにも見て取れる。

1.2 モースと静山の図

『その日』・『PSM』と『大森貝塚』 モースは作図に際して参考書を見つけるのに苦労している(『その日2』:p.10)。また親交のあった蝸川式胤の『観古図説—陶器之部—』(蝸川1876)の石版刷手彩色の図を、フランスや英国の刊行物より「はるかによく陶器の特質をあらわしている」と評価している(『その日2』:pp.243~244)。しかし『観古図説』の図は斜め上から見通して陰影をつけた立体図である(Fig. 6)。カラー写真のようにリアルな表現であるが、それは本質的にモースの目指すものとは異なっていた。

モースが10月9日の第3回調査以前、つまり第1・2回調査時に出土した「甕及び破片は、特に記した物以外、全部実物の半分の大きさで描いてある」という図は『その日』の中に見てとれる。どちらもモース自筆原画を銅版印刷したものと思われる。ここに『PSM』と『大森貝塚』を加えると、モースの首尾一貫した方針とその実行力がわかる。

『その日』には3回目までの調査で出土した16点の土器図がある。一見してわかるのは構図が1点を除き、どれも水平の目線で統一されていることである(Fig. 7-1)。また完形土器の径の数値や、破片には器形や網代底についてのメモも添えられている。これは静山の原図に記されているものと酷似し、こうした作業が当初から一貫して行われていたことを示している。



Fig. 6 “Kanko Zusetsu” (Ninagawa 1876)